現代日本小說大系

38

新現

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第三十八卷

河出書房版

現代日本小說大系 第三十八卷

昭和二十五年六月二十日 初版印刷
昭和二十五年六月二十五日 初版發行

現代日本小說大系（並製）
定價 弐百參拾円
改定 地方賣價 弐百四拾円
河出書房

著者 永井壯吉 谷崎潤一郎

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地 河出孝雄

編集者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地 日本近代文學研究會 中村光夫

印刷者 東京都千代田區神田三崎町二丁目十二番地 加藤保

發行所 東京都千代田區神田小川町三ノ八 株式會社 河出書房
會員番號A一一一〇一四番
電話神田(25)三一七四番

目次

永井荷風

つゆのあとさき……四
あぢさゐ……七四
榎物語……八五
雨瀟瀟……九三
雪解……一一

谷崎潤一郎

蓼喰ふ蟲……二六
吉野葛……二四
盲目物語……三三
蘆刈……三八
解說（中村光夫）……三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

永井荷風

つゆのあとさき
あぢさゐ
榎物語
雨瀟瀟
雪解

つゆのあとさき

一

女給の君江は午後三時から其日は銀座通りのカッフェーへ出ればよいので、市ヶ谷本村町の貸間からぶら〳〵堀端を歩み見附外から乗つた乗合自動車を日比谷で下りた。そして鐵道線路のガードを前にして、場末の町へでも行つたやうな飲食店の旗ばかりが目につく横町へ曲り、貸事務所の硝子窓に周易判斷金鶴堂といふ金文字を揭げた賣卜者をたづねた。

去年の暮あたりから、君江は再三氣味のわるい事に出遇つてゐたからである。同じカッフェーの女給二三人と歌舞伎座へ行つた歸り、シールのコートから搦ひの大島の羽織と小袖から長襦袢まで通して袂の先を切られたのが始まりで、その次には眞珠入り本籠甲のさし櫛をどこで拔かれたのか、知らぬ間に拔かれてゐたことがある。掏摸の仕業だと思へばそれまでの事であるが、又どうやら意趣ある者の惡戯ではないかといふ氣がしたのは、某後猫の子の死んだのが貸間の押入に投入れてあつた事である。君江は此年月隨分みだらな生活はして來たものゝ、然しそれほど人から怨を受けるやうな惡いことをした覺えは、どう考へて見てもない。初めは唯不思議だとばかり、さして氣にも留めなかつたが、ついこの頃、街巷新聞といつて、重に銀座邊の飲食店やカッフェーの女の噂をかく餘り性の好くない小新聞に、君江が今日まで誰も知らう筈がないと思つてゐた事が出てゐたので、どうやら急に氣味がわるくなつて、人に勸められるがまゝ、まづ卜占をみて貰はうと思つたのである。

街巷新聞に出てゐた記事は誹謗でも中傷でもない。寧君江の容姿をほめたゝへた當り觸りのない記事であるが、その中に君江さんの內腿には子供の時から黑子が一つあつた。これは成長してから浮氣稼業をするしるしださうだが、果して其通り、女給さんになつてから黑子はいつの間にか增えて三つになつたので、君江さんは後援者が三人できるのだらうと、內心喜んだり氣を揉んだりしてゐるといふ事が書いてあつた。君江はこれを讀んだ時、何だか薄氣味のわるい、誠にいやな心持がした。左の內腿に初めは一つであつた黑子がいつとなく竝んで三つになつたのは決して虛誕でない。全くの事實である。自分でそれと心づいたのは去年の春上野池の端のカッフェーに始めて女給になつてから、暫くして後銀座へ

移つたころである。それを知つてゐるのはまだ女給にならない前から今もつて關係の絶えない松崎と云ふ好色の老人と、上野のカッフェー以來兎や角人の噂に上る清岡進といふ文學者と、まづこの二人しかない筈である。黒子のある場所が他とはちがつて親兄弟でも知らう筈がない。風呂屋の番頭とてそこまでは氣がつくまい。黒子の有無は別にどうでもよい事であるが、風呂屋の番頭さへ氣のつかない事を、どうして新聞記者が知つてゐたのだらう。君江はこの不審と、去年からの疑惑とを思合せて、これから先どんな事が起るかも知れないと、急に空おそろしくなつて、今まで神信心は勿論、お御籤一本引いたことのない身ながら、突然占ひを見てもらふ氣になつたのである。

アパートメントの一室を店にしてゐる新時代の賣卜者は年の頃四十前後、口髭を刈り洋服を着、鼈甲のロイド眼鏡をかけ、デスクに凭れて客に應對する樣子は見たところ醫者か辯護士と變りはない。省線電車の往復するのが能く見える硝子窗の上には『天佑平八郎書』とした額を掲げ、壁には日本と世界の地圖を貼り、机の傍の本箱には棚を異にして洋書と帙入の和本とが竝べてある。

君江は薄地の肩掛を取つて手に持つたまゝ、指示された椅子に腰をかけると、洋裝の賣卜者はデスクの上によみかけの書物を閉ぢ廻轉椅子のまゝぐるりと此方へ向直つて、

「御緣談ですか。それとも大體にお身の上の吉凶を見ませうか。」とわざとらしく笑顔をつくる。君江は伏目になつて、

「別に緣談といふわけでも御在ませむ。」

「では、まづ大體の事から拜見しませう。」と易者は恰も婦人科の醫者が患者の容態をきくやうに、成りたけ氣がねをさせまいと苦心するらしい碎けた言葉づかひになり、「占ひを見つけると面白いものと見えまして、いろ〳〵なお客樣がお出になります。毎朝會社のお出かけにお寄りになつて、其日其日の吉凶を見る方もあります。然しむかしから當るも八卦、當らぬも八卦といふ事がありますから、凶の卦に當つてもあまりお氣におかけなさらん方がよいです。お年はおいくつで居らつしやいます。」

「丁度で御在ます。」

「それでは子の年でゐらつしやいますな。それからお生れになつたのは。」

「五月の三日。」

「子の五月三日。さうですか。」と易者はすぐに筮竹を把つて口の中で何か呟きながらデスクの上に算木を竝べ、「お年廻りは離中斷の卦に當ります。併し文字通り易の釋義を申上げても廻遠くて要領を得ない事になりませうから、わたくしの思ひついた事だけを手短に申上げて見ませう。大體を申上げると、この離中斷の卦に當る方は男女に限らず親兄弟には

なれ友達も至つて少く一人で世を渡る傾きがあります。それにあなたのお生れになつた月日から見ますと、遊魂巽風の卦に當ります。これは一時お身の上に變つた事が起つても、その變つた事が追々元の形に立戻るといふ卦であります。この卦から考へて見ますと、現在のお身の上は一時變つた事の起つた後、追々もとのやうになつて行かうと云ふ間のやうに思はれます。天氣に例へて申上げれば暴風のあつた後、その名殘りがなか〳〵靜まらない。併し追々靜かになつて、やがてもとの天氣にならうといふその途中だと申したらよいでせう。」

君江は膝の上に肩掛を弄びながらぼんやり易者の顏を見てゐたが、その判斷は全くその身に覺えがない事ではない。どこか當つてゐる處があるので、何となく氣まりのわるいやうな心持で再び伏目になつた。一時身の上に變つた事が在つたと言ふのは、大方兩親の意見をきかず家を飛出し、東京へ來て、とう〳〵女給になつた事だらうと思つたのである。

君江が家を出たわけは兩親はじめ親類中擧つて是非にもと說き勸めた縁談を避けやうが爲めであつた。君江の生れた家は上野停車場から二時間ばかりで行かれる埼玉縣下の□□町に在つて、その土地の名物になつてゐる菓子をつくる店である。君江は小學校の友達の中で、一時牛込の藝者になり、一年たつかたゝぬ中身受をされて、人の妾になつてゐた京子といふ女と絶えず往來をしてゐたので、田舍者の女房などになる氣はなく、家を逃げ出して其のまゝ京子の家の厄介になつた。田舍から迎ひの人が來て、二三度連れ戻されても又すぐ飛出す始末。親達も困りぬいて、君江の我儘を通させ銀行か會社の事務員になる事を許した。

君江は京子の旦那になつてゐる川島といふ人の世話で、間もなく或保險會社に屆はれたものゝ、これは一時實家へ對しての申譯に過ぎないので、半年とはつゞかず、その後はぶらぶら京子の家に遊んで日を暮してゐる中、突然京子の旦那は會社の金を遣込んだ事が露見して檢事局へ送られる。京子は藝者に出てゐた頃のお客をそのまゝ妾宅へ引込み、それでも足りない時は知合ひの待合や結婚媒介所を歩き廻つて、結局何不自由もなく日を送つてゐるのを、傍で見てゐる君江もいつか之をよい事にして其の仲間にはいつた。然し何分にも其筋の檢擧がおそろしいので、京子はもとの藝者にならうと言出す。君江もとも〳〵藝者はどんなものか一度はなつて見たいと思ひながら、鑑札を受ける時所轄の警察署から實家へ問合せの手續をする規定のある事を知つて、已むことを得ず女給になつた。

京子は田舍の家へ仕送りをしなければならぬ身であるが、君江はそんな必要がない。田舍に育つたゞけそれほど流行の物に身を飾る心もなければ、芝居や活動のやうな興行物も、

人から誘はれないかぎり、自分から進んで見に行かうとはしない。小説だけは電車の中でも拾ひ讀みをする程であるが、其の他には自分でも何が好きだかわからないと言つてゐる位で、結局貸間の代と髪結賃さへあれば、強ひて男から金など貰ふ必要がない。金などは貰はずに、隨分男のいふまゝになつてやつた事もある程なので、君江は今までいかほど淫慾な生活をして來ても、人から左程怨を受けるやうな筈はないと思ひ込んでゐる。占者の說明を待つて、

「それでは今のところ別にたいして心配するやうなことはないんで御在ますね。」

「御健康はいかゞです。現在別に御わるいところがないのなら、無論近い將來にもさして病難があるとは思はれません。現在は唯今も申上げたやうに波瀾のあつた後むしろ無事で、いくらか沈滯といふやうな形もあります。御自分ではお氣がつかないで居らつしやるかも知れませんが、何か知ら不安で、おちつかないやうな氣がなさるのかも知れません。然し易の卦では唯今申上げたやうに一時の變動が追々靜まつて行くのですから、此れから先たいした事件が起らうとは思はれません。然し何か御心配な事があつて、その事をどうしたらいゝかと思召すなら、其の特別な事について、もう一度見直しませう。それで大抵お心當りがつくだらうと思ひます。」と易者は再び筮竹を取り上げた。

「實はすこし氣にかゝる事が御在まして。」と君江は言ひかけたが、まさかに黑子の事は明らさまに言出しにくいので、「自分には別に覺がないんですけれど、誰かわたくしの事を誤解してゐる人がありはしないかと思ふやうな事が御在ます。」

「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉ぢて再び筮竹を數へ算木を置き直して、

「成程。この卦は物に影の添ふ事を意味します。して見ると、何か御自分でいろ〳〵思ひすごしをなさるのですな。それがため無い事も有るやうに思はれて來ます。唯今の言葉で申すと幻影と實體ですな。物があつて影の生ずるのが自然でありますが、時と場合には、それとは反對に影から物の起ることもあります。それ故まづ影をなくすやうになされば、自然と物事は落つく處へ落ちついて行くわけで。さういふ御心持で居らつしやれば、別に御心配には及ばないと思ひます。」

君江は易者のいふ事を至極尤だと思ふと、自分ながらつまらない事を氣に掛けてゐたと、忽ち心丈夫な氣になつてしまつた。それでもまだ何やらきいて見たいやうな心持がしながら、然しあまり細微な事まで問掛けて、それがため現在の職業はまだしもの事、二三年前京子と二人で待合や媒介所を歩き廻つた事まで知られてはと、底氣味のわるい心持もする。猫の死骸や櫛のなくなつた事もきいて見ようとは心づきながら、カツフエーへ行く時間が氣になるので、今日はこのまゝ

立去らうと考へ、

「失禮ですが、御禮は。」といひながら帶の間へ手を入れる。

「壹圓いたゞく事にしてありますが、いかほどでもお思召しで宜しいのです。」

出入口の戸があいて、洋服の男が二人無遠慮に君江の腰をかけてゐるすぐ側の椅子に坐つたのみならず、其一人はぎよろりとした眼付の、どうやら刑事かとも思はれる樣子に、君江は横を向いたまゝ椅子から立つて、易者にも挨拶せず、戸を明けて廊下へ出た。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日かげに、日比谷公園から堀端一帶の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行の衣裳の靡へるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、數寄屋橋のたもとへ來かゝると、朝日新聞社を始め、をちこちの高い屋根の上から廣告の輕氣球があがつてゐるので、立留る氣もなく立留つて空を見上げた時、後から君江さんと呼びながら馳け寄る草履の音。誰かと振返れば去年池の端のサロン・ラックで一緒に働いてゐた松子といふ年は二十一二の女で。その時分にくらべると着物も姿もずつと好くなつてゐる。君江は同じ經驗からすぐに察して、

「松子さん。あなたも銀座。」

「えゝ。いゝえ。」と松子は曖昧な返事をして、「去年の暮、暫くアルプスにゐたのよ。それから遊んでゐたの。だけれど又、どこかへ出たいと思つて實はこれから五丁目のレーニンつていふ酒場。君江さんも御存じでせう。あの時分ラックにゐた豐子さんが居るから、鳥渡樣子を見て來ようと思つてゐるの。」

「さう。あなた、アルプスにゐたの。ちつとも知らなかつたわ。わたしはあれからずつとドン・フリンにゐるわ。」

「此の春だつたか、アルプスでお客樣から聞いたことがあつたわ。お逢ひしたいと思つてもつい時間がないでせう。あの、先生もお變りがなくつて。」

君江は小說家清岡進の事にちがひないとは思ひながら、數の多いお客の中には、辯護士の先生もあれば、醫者の先生もあるので、それとなく念を押すに若くはないと思つて、「えゝ。この頃は新聞の外に映畫や何かで大變おいそがしいやうだわ。」

松子は之を何と思ひちがひをしたのか、「アラ、さう。」といかにも感に打たれたらしく深く息を呑んで、「男はいざとなると薄情ねえ。わたしもいゝ經驗をしたのよ。だから今度は大に發展してやらうと思つてるのよ。」

君江は心の中で高が五人か十人、數の知れた男の事を大層らしく經驗だの何だのと言ふにも及ぶまいと、可笑しくなつて來て、からかひ半分、わざと沈んだ調子になり、「あの先生、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

には立派な奥様はあるし、スターで有名な玲子さんがあるし、わたし見たやうな女給なんぞは全く一時的の慰み物だわ。」

橋を渡ると、人通りは尾張町へ近くなるに從つて次第に賑かになる。それにも係らず松子は正直な女と見えて、忽激した調子になり、

「だつて、玲子さんが結婚したのは、先生が君江さんを愛した爲だつていふ評判よ。さうぢやないの。」

君江はあたりを憚らぬ松子の聲に辟易して、「松子さん。その中ゆつくり會つて話しませうよ。何なら、鳥渡お寄んなさいな。ドン・フワンでも募集してゐるから紹介してもいゝわ。」

「あすこは今幾人ゐて。」

「六十人で、三十人づゝ二組になつてゐるのよ。掃除はテーブルも何も彼も男の人がするから、それだけ他よりも樂だわ。」

「一日幾番ぐらゐ持てるの。」

「さうねえ。この頃ぢや三ッ持てればいゝ方だわ。」

「それで、綺羅を張つたら、かつ〳〵ねえ。自動車だつて一度乘ると、つい晩晩になつてしまふし……。」

君江はこま〳〵した世智辛いはなしが出ると、他人の事でもすぐに面倒でたまらなくなる。それに又、金なんぞはだまつてゐても無理やりに男の方から置いて行くものと思つてゐるので、人込の中に隔てられたまゝ松子の方には見向きもせず、日の光に照付けられた三越の建物を眩しさうに見上げながら、すた〳〵四角を向側へと横ぎつてしまつたが、少しは氣の毒にもなつて、後を振返つて見ると、松子は以前の處に立止つたまゝ、挨拶のしるしに遠くから鳥渡腰をかゞめ、それでもう安心したといふ風で、これも忽ち人通りの中に姿を沒した。

二

松屋呉服店から二三軒京橋の方へ寄つたところに、表附は四間間口の中央に弧形の廣い出入口を設け、その周圍にDON・JUANといふ西洋文字を裸體の女が相寄つて捧げてゐる漆喰細工。夜になると、此の字に赤い電氣がつく。これが君江の通勤してゐるカツフエーであるが、見渡すところ殆ど門並同じやうなカツフエーばかり續いてゐて、うつかりしてゐるとどれがどれやら、知らずに通り過ぎてしまつたり、わるくすると門ちがひをしないとも限らないやうな氣がするので、君江はざつと一年ばかり通ふ身でありながら、今だに手前郷の眼鏡屋と金物屋とを目標にして、その間の路地を入るのである。路地は人ひとりやつと通れる程狹いのに、大きな芥箱が竝んでゐて、寒中でも青蠅が翼を鳴し、晝中でも鼬のやうな老鼠が出沒して、人が來ると長い尾の先で水溜の水を

はね飛す。君江は袂をおさへ拔足して十歩ばかり。やがて裏通りを行く人の顏も見分けられるあたり。安油の惡臭が襲ふやうに湧き出してくる出入口をくゞると、何處といふ事なく竈蟲のぞろ〳〵這ひ廻つてゐる料理場である。料理場は後から建て增したものらしく、銀座通りに面した表附とはちがつて、震災當時の小屋同然、屋根も壁もトタンの海鼠板一枚で圍つてあるばかり。それでも土間から、急な梯子段を土足のまゝ登つて行くと、十疊ばかり疊を敷いた一室があつて、四方の壁際くるりと十四五臺ばかりも鏡臺が竝べてある。丁度三時五六分前。十疊の一室は、朝十一時から店へ出てゐた女給と、今方來たものとの交代時間で、坐る場所もない程混雜してゐる最中。鏡一臺の前にはいづれも女が二三人づゝ纏眼兒押しに顏を突出して、白粉の上塗をしたり髮の形を直したり、或は立つて着物を着かへたり、大胡坐で足袋をはき替へたりしてゐるのもある。

君江は堅シボの一重羽織をぬいで肩掛と一つにして風呂敷に包んだ。そして廊下への出口に置いてある衣裳棚に、名前の貼紙がしてある處を見て其の包を載せ、コンパクトで鼻の先を叩きながら、廊下づたひにパンツリイを通り拔けると、丁度店二階の方から歩いて來る春代といふ女に出逢つた。歸り道が同じ四谷の方角なので、六十人ゐる同輩の中では一番心安くなつてゐる。

「春さん。昨夜はグレたんぢやないの。後で何かおごつてよ。」

「それアあなたでせう。わたし隨分待つてゐたのよ。今夜はきつと一緒に歸りませう。其の方が經濟だからねえ。」

君江は其のまゝ表二階の方へ行きかけると、階段の下から下足番をしてゐる男ボーイが、「君江さん、電話です。」と頻に呼んでゐる聲が聞えた。

「はアイ。」と大聲に答へながら、口の中で「誰だらう。いけすかない。」とつぶやきながら、テーブルや植木鉢の間を小走りに通り拔けて階段を下りて行つた。

階下は銀座の表通りから色硝子の大戸をあけて入る見通しの廣い一室で、坪數にしたら三四十坪程もあらうかと思はれるが、左右の壁際には衝立の裏表に腰掛と卓子とをつけたやうなボックスとか云ふものが据ゑ竝べてあつて、天井からは提灯に造花、下には椅子テーブルに植木鉢のみならず舞臺で使ふ疊のやうな植ゑ込みが置いてあるので、何となく狹苦しく一見唯ごた〳〵した心持がする。正面の奥深い片隅に洋酒を棚に竝べた酒場があつて、壁に大な振子時計、その下に帳場があり、續いて硝子戸の内に電話がある。君江は行きちがふ人毎に笑顏をつくりながら、電話室へ駈け込み、「もしもしどなた。」ときくと、電話は君江を呼んだのではなく、清子といふ女給の聞きちがへであつた。

爪先で電話室の硝子戸を突きあけ、「清子さん。電話。」と呼びながら君江は反身に振返つてあたりを見廻したが、書間のことで客はわづかに二組ほど、そのまはりに女給が七八人集つてゐるばかり。植木の葉かげを透して見ても清子の姿は見えない。誰やらが「清子さんは早番でせう。」と云ふ。君江はその通り電話の返事をして硝子戸の外へ出ると、其の姿を見て、洋服をきた中年の痩せた男が帳場の臺に身を倚せたまゝ、「君江さん。」と呼留めて、「どうしました。占ひは。」

「たつた今、見て貰つたわ。」

「どうでした。やつぱり男のおもひでせう。」

「それなら見てもらはなくつても覺えがある筈ぢやないの。もうそんな景氣ぢやないわ。小松さん。わたし大に悲觀してゐるのよ。」

「へえ。君江さんが……。」と小松と云はれた男は圓顔の細い目尻に皺をよせて笑ふ。年はもう四十前後。神田の何とやら云ふダンスホールの會計に雇はれてゐる男で、夕方六時に出勤する頃まで、毎日懇意なカツフエーを歩き廻つて女給の貸間をはじめ、質屋の世話、芝居の切符の取次など、何事にかぎらず女の用を足してやつて、皆から小松さん〳〵と重寶がられるのを此の上もなく嬉しいことにしてゐる男である。いや味な事は言はないかはり、お客になつて飲み食ひもした事がない。以前はどこかの箱屋だともいふし役者の男衆だつたといふ噂もある。君江はこの男から日比谷の占者のことをきいたのである。

「君江さん。どうでした。何か手がゝりがありましたか。」

「さア。何だかゝいろ〳〵な事を言はれたけれど、何の事だかわけがわからないのよ。わたしの方でも別に何ともきいては見なかつたんだけれど。」

「それぢや駄目だ。君江さんと來たら實にのん氣だからな。」

「臺囘損したわ。」と君江は人に問はれて始めて占者の判斷の其要領を得てゐなかつた事と自分のきゝ方も隨分不熱心であつた事に心づいた。最少し向の困るくらゐ委しくこまかい事までできけばよかつたといふ氣がした。

「でもねえ、小松さん。當分今の通りで別條はないんですとさ。覺えてゐるのはそれつきりよ。いろんな事を言はれたけれど『何が何だかわからないのヨ』なのよ。まつたくさ。何しろ占を見てもらふのは生れて初めてゞせう。見て貰ひつけないと駄目なものねえ。占もやつぱり聞方があるんぢやないか知ら。」

「占ひかたはあつても、別に聞き方はないでせう。」

「それでも、お臀者さまでも始めて見てもらふ時には、いろいろ此方から言はなくつちや、いけないつて云ふぢやないの。だから占や何かでもやつぱりさうだらうと思ふわ。」

表梯子の方から蝶子といふ三十越したでつぷりした大年增

が拾圓紙幣を手にして、「お會計を願ひます。」と帳場の前へ立ち、壁の鏡にうつる自分の姿を見て半襟を合せ直しながら、

「君江さん。二階に矢さんが居てよ。行つておあげなさいよ。うるさいから。」

「さつき見掛けたけれど、わたしの番ぢやないから降りて來たのよ。あの人、先に辰子さんのパトロンだつて、ほんとうなの。」

「さうよ。日活の吉さんに取られてしまつたのよ。」とはなし出した時會計の女が傳票と剩錢とを出す。その時この店の持主池田何某といふ男に事務員の竹下といふのが附き隨ひ、コック場へ通ふ帳場の傍の戸口から出て來る姿が、酒場の鏡に映つた。蝶子と君江とは挨拶するのが面倒なので、さつさと知らぬふりで二階の方へ行く。池田といふのは五十年配の齒の出た貧相な男で、震災當時、南米の植民地から歸つて來て、多年の蓄財を資本にして東京大阪神戸の三都にカッフェーを開き、まづ今のところでは相應に利益を得てゐるといふ噂である。

表梯子から二階へ上つた蝶子は壁際のボックスに坐つてゐる二人連れの客のところへ剩錢を持つて行き、君江は銀座通りを見下す窓際のテーブルを占めた矢さんといふお客の方へと歩みを運びながら、

「いらつしやいまし。この頃はすつかりお見かぎりね。」

「さう先廻りをしちやアずるいよ。先日はどうも、すつかり見せつけられまして。あんなひどい目に遇つた事は御在ません。」

「矢さん。たまにやア仕方がないことよ。」と愛嬌を作つて君江は膝頭の觸れ合ふほどに椅子を引寄せて男の傍に坐り、いかにも懇意らしく卓の上に置いてある敷島の袋から一本抜取つて口にくはへた。

矢さんといふのは赤坂溜池の自動車輸入商會の支配人だといふ觸込みで、一時は毎日のやうに女給のひまな晝過ぎを目掛けて遊びに來たばかりか、折々店員四五人をつれて晩餐を振舞ふ。時々これ見よがしに鑒者をつれて來る事もある。年は四十前後、二ッはめてゐるダイヤの指環を抜いて見せて、女達に品質の鑑定法や相場などを長々と説明するといふやうな、萬事思切つて齒の浮くやうな事をする男であるが、相應に金をつかふので女給連は寄つてたかつて下にも置かないやうにしてゐる。君江は既に二三度芝居の切符を買つて貰つたこともあるし、休暇時間に松屋へ行つて羽織と半襟を買つて貰つたこともあるので、この次どこかへ御飯でも食べに行かうと誘はれゝば、其先は何を言はれても、さう情なく振切つてしまふわけにも行かない位の義理合ひにはなつてゐる。それ故矢さんからひやかされたのを、なまじ胡麻化すよりも明

さまに打明けてしまつた方が、結局面倒でなくてよいと思つたのである。矢さんは内心むつとしたらしいのを笑ひにまぎらせて、

「兎に角羨しかつたな。罪なことをするやつだよ。」とテーブルの周圍に集つてゐるお民、春江、定子など三四人の女給へわざとらしく冗談に事寄せて、「お二人でお揃ひのところを後からすつかり話をきいてしまつたんだからな。人中なのに手も握つてゐた。」

「あら。まさか。そんなにいちや〳〵したければ芝居なんぞ見に行きやアしないわ。わきへ行くわよ。」

「こいつ。ひどいぞ。」と矢さんは撲つまねをするはずみにテーブルの縁に在つたサイダアの壜を倒す。四五人の女給は一度に聲を揚げて椅子から飛び退き、長い袂をかゝへるばかりか、テーブルから床に滴る飛沫をよける用心にと裾まで摘み上げるものもある。君江は自分の事から起つた騒ぎに據所なく、雑巾を持つて來て袂の先を口に咬へながら、テーブルを拭いてゐる中、新しく上つて來た二三人連の客。いらつしやいましと大年増の蝶子が出迎へて「番先はどなた。」と客の註文をきくより先に當番の女給を呼ぶ金切聲。「君江さんでせう。」と誰やらの返事に君江は雑巾を植木鉢の土の上に投付けて「はアい。」と言ひながら、新來のお客の方へと小走りにかけて行つた。

客は二人とも髭を生した五十前後の紳士で、松屋か三越あたりの歸りらしく、買物の紙包を携へ、紅茶を命じたまゝ女給には見向きもせず、何やら眞面目らしい用談をしはじめたので、君江は却てそれをよい事に、ひまな女達の寄集つてゐる壁際のボックスに腰をかけた。テーブルの上には葛羊羹に鹽煎餅、南京豆などが、袋のまゝ、新聞や雑誌と共に散らかし放題、散らかしてあるのを、女達は手先の動くがまゝ摘んでは口の中へと投げ入れてゐるばかり。活動寫眞の評判や朋輩同士の噂にも毎日の事でもう飽きてゐる。睡氣がさしても流石こゝでは居睡りをするわけにも行かないらしく、いづれも所業なげに唯時間のたつのを待つてゐるといふ樣子。其の時隅の方でひとり雑誌の寫眞ばかり繰りひろげて見てゐた女が、突然、

「アラ、實にシャンねえ。清岡先生の奥樣よ。」といふ聲に、ボックスに休んでゐた女は一齊に顔を差出した。君江も葛羊羹を頬張りながら少し及腰になつて、

「どれさ。見せてよ。わたしまだ知らないんだからさ。」

「はい。よく御覽なさい。」と以前の女が差付ける雑誌の挿繪。見れば、縁側に腰をかけてゐる夫人風の女の姿で、「名士の家庭。」「創作家清岡進先生の御夫人鶴子さまのお姿。」としてあつた。

「君江さん。あんた、何ともない事。そんなもの見て。わた

しなら破いてしまひたくなるわ。」と寫眞の上に南京豆を打ちつけたのは、もと齒醫者の妻で生活難から女給になつた鐵子である。

「あなた。隨分燒餅やきねえ。」と君江は却て驚いたやうに鐵子の顏を見返して、「いゝぢやないの。奧樣なら奧樣で、氣にしないだつて。」

「君江さんは全く徹底してゐるわ。」とダンス場から轉じてカツフエーに來た百合子といふのが相槌を打つと、もとは洋髮屋の梳手であつた瑠璃子といふのが、

「兎に角一番幸福なのは清岡さんよ。令夫人はシヤンだし、第二號は銀座に於ける有名なる女給さんだし……。」

「ちよいと何が有名なのさ。止して頂戴よ。」と君江はわざとらしく憤然と椅子を立つて、先刻から打捨てゝ置いた自動車商會の矢田さんの方へと行つてしまつた。女達は無論戲れとは知りながら、少し心配したやうに齊しく其の後姿を見送つたが、瑠璃子はもと〳〵梳手の時分ない〳〵私娼窟に出沒して君江とも一二度言葉を交へた間柄。偶然このカツフエーで邂逅しても、互に默契する處があるらしく祕密を守り合つてゐるくらゐなので、何を言つても又言はれても互に氣を惡くする筈はないと、平氣な顏で、折からテーブルを叩くらしい音がするのを聞きつけ、自分が持番の客ではないかと、音する方へ目を注ぐ。丁度其の途端、階段から上つて來る新しい客の洋服姿が向の壁の鏡に映つたのを早くも認めて、「アラ清岡先生よ。」と瑠璃子は小聲で一同に知らせた。

「先生。くしやみが出なかつて。」と君江とは仲の好い春代が逸早く駈寄つて、「あつちのボックスがいゝわよ。」と洋服の袖に縋り、人目につかない隅のボックスへ連れて行つた。これは君江を張りに來る自動車屋の矢田さんが、まだ歸らずにゐるので、萬一の事を用心した春代の心づかひである。

「歩いて來るともう暑い。黑ビールか何か貰はうよ。」と清岡進は抱へてゐた新刊雜誌と新聞紙とをテーブルの下の揚板に押入れ、新しい鼠色の中折帽をぬいで造花の枝にかけた。紺地二重ボタンの背廣に蝶結のネキタイ。年の頃は三十五六。鼻先と頤のとがつてゐるのが目に立つので、色の白い眼の大きい頬のこけた顏立は一層神經質らしく見えるのに、長く舒ばした髮をわざと無造作に後に搔き上げてゐる樣子。誰が目にも新進の藝術家らしく、また宛然活動寫眞中に現れて來る人物らしくも見える。その父は漢學者だとかいふ事であるが、清岡は仙臺あたりの地方大學に在學中も學業の成績は極めて不出來で、卒業の後文學者の仲間入はしたものゝ、ついこの三四年ほど前までは、更に月旦に登るやうな著述もなかつた。然るに、何から思ひついたのやら、ふと曲亭馬琴の小說夢想兵衞胡蝶物語を種本にして、原作の紙鳶を飛行機に改め、「彼はどこへでも飛んで行く。」といふ題をつけ、全篇の趣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook